

線維筋痛症とは

原因不明の全身の疼痛に加え、不眠、うつ病などの精神症状や過敏性腸症候群・逆流性食道炎・過活動性膀胱などの自律神経系の症状を伴います。罹患者は中高年の女性に多いとされています。全身の手足の関節や筋肉、頸、背中、胸、腰部と広範囲に疼痛が出現します。

診断基準としては、指を用いた触診により18箇所（両側後頭部、頸椎下方部、僧帽筋上縁部、棘上筋、第2肋骨、肘外側上顆、臀部、大転子部、膝関節部）の圧痛点のうち11カ所以上に疼痛が認められる場合に線維筋痛症と診断されます。



線維筋痛症の一般的な治療

線維筋痛症は原因が特定されていないため、確立した治療法はありません。線維筋痛症の治療目標は痛みの完全な消失でなく、痛みやその他の自覚症状の緩和をはかり、病気発症で失った生活機能の改善を目指すこととされています。病気の理解と受容が重要であり、治療により日常生活機能（ADL）、生活の質（QOL）の改善、向上を目指すことが重要とされています。

薬物療法

- (1) 抗うつ薬・抗けいれん薬・ガバペン・リリカなど
- (2) 消炎鎮痛薬・オピオイド系薬物・トラムセットなどその他認知行動療法

有酸素運動

補完・代替療法（鍼灸療法・マッサージ・リラクゼーション など）

線維筋痛症に対する遠絡統合療法

遠絡統合療法では、脊髄や脊髄神経、間脳、脳幹部などの役割から痛みの症状の出方や部位によって、身体の深部でどのような病態が成り立っているかを診立て治療します。

中枢神経系の機能を再建する事は、全身症状を根本的に良くすることにつながります。

症状と原因部位

- ◎顔面及び肩関節から指まで、
股関節から足趾までに発した「痛み」「重み」「触れない痛み」⇒各疼痛部に対応する脊髄の神経線維
- ◎体幹の「痛み」「重み」⇒各疼痛部位に対応する脊髄神経の神経線維
- ◎全身あちこちに現れる痛み⇒視床
- ◎不眠症 うつ病⇒間脳（視床～視床下部）
- ◎過敏性腸症候群など⇒延髄迷走神経・腰椎・孤束核

遠絡統合医学では、神経機能の障害を神経細胞と神経線維に分けて分析しています。痛み症状は神経線維の障害になります。神経線維の障害が修復されるためには、血液やリンパ液、電解質が十分に循環する必要があります。遠絡統合医学では、神経系の伝達も含め、血液やリンパ液、電解質などの流れを総称してライフフローと呼んでいます。スムーズなライフフローが十分に確保されている事は自己の修復力、治癒力に直結します。遠絡統合療法の目的はライフフローを調整する事にあります。つまり、身体の自己治癒力を再建させる事になります。「長く患っている」「症状が変化しない」という状態の根本に対してのアプローチができます。

症例 1

50代 男性

最初、右手の筋肉痛と痺れを感じて、整形外科を受診したところ、テニス肘と診断され、湿布とロキソニンを処方されました。

半月後右手の痛みと共に左手にも痛みが出現し総合病院整形外科を受診、手根管症候群と診断されました。

1ヵ月後、両手の痛み以外に、足底や足背にも痛みが出るようになりました。同月中に全身（両上肢、両下肢、腹部、背部）に鍼で刺されるよう痛みが出現しました。しかし、内科では筋肉痛という診断でした。

更に1ヵ月後、全身筋肉痛が強くなり、風当たると足背にぴりぴりと痛みを感じ、シャワーを浴びられない状態となりました。母親が膠原病だったので、自分も膠原病ではないかと心配して、内科リウマチ科にも受診しました。血液検査の結果、膠原病の疑いがあると診断を受け、プレドニン10mg/day、ノイロトロピンが処方されました。

しかし、更に1ヵ月後の精密検査結果で、膠原病は否定されました。全身の痛みが取れない為、大学病院へも受診され、原因不明という事で大学病院内のペインクリニックを紹介され、CRPSの疑いと診断がつき、プレドニン、リンラキサー、レキソタン、ノリトレン、メイラックス、ガバペンの服用に切り替わりました。

発症より一年が経過し、多少の軽減を感じるもピリピリと触れない痛みが両上肢、両下肢、腹部、背部などに目立っている状態で遠絡療法を開始しました。

8回の治療で、全身のぴりぴりとした痛みが大幅に改善し、風が当たる時の足背の痛みは消失し、シャワーもあびられる状態になりました。

遠絡療法開始3ヵ月目に、強い冷房による右手の震えを訴える事がありましたが、治療後消失し再発なく生活をされています。痛みの加減をみて継続治療を行いますが、生活内で支障なく生活できるため、本人の希望でメンテナンスとしての治療を行うのみとなっています。

解 説

全身性に起こる筋肉の痛みは、脳の視床という所で神経線維が破壊されたことによる症状と考えています。視床はSpinal cord（脊髄）に影響し、各レベルに対応した身体部位に痛み症状を引き起こします。手の震えは全身の痛みを招いた脳の部位に近い部位が関わる症状になります。改善傾向にあった為、一回の処置で広がらずに済んだと考えています。